

わが国における「瓜2つ妄想」の精神病理学的研究

小 泉 明

抄録 対象は、「瓜2つ妄想」を呈した本邦での報告例17例に、自験例4例をつけ加えた21例である。

その中、16例は分裂病、2例は急性妄想状態で、パラフレニー、単純ヘルペス脳炎、診断不明のものなどがそれぞれ1例ずつである。

症例の女性優位性（21例中14例）が注目されるが、男性例（7例）も増加しており、特異な傾向とは見なし得ない。

不安・恐怖に対する基本姿勢は、洋の東西を問わず不変であるが、ヨーロッパ人の分析的思考に対比される日本人の自他未分離の全体的思考形態が、original と密接な関係を持つ姓名を有し、original と同一の空間からその分身として患者の妄想世界に出現する、本邦例に特異的な sosie の様相に投影されている。また、当妄想の発現機序を、「蜃気楼」のように変質した original から発散される異和感に対する心理的解決法の1つとしての、患者による「original の sosie 命名作用」であることが提唱された。

弘前医学 37: 814—832, 1985

Key words: sosie

Capgras' syndrome

delusion of family negation

double

Alcmene's complex

PSYCHOPATHOLOGICAL STUDY ON "ILLUSION OF DOUBLES" (CAPGRAS' SYNDROME) IN JAPANESE CASES

AKIRA KOIZUMI

Abstract 21 cases of "illusion of doubles" were reported, adding 4 personal cases to the 17 already reported.

16 cases of the 21 were schizophrenias, 2 were acute delusional states, one was paraphrenia, one was supposed to be herpes simplex encephalitis and the last one was not defined.

The predominance of women among Japanese cases (14 of 21) was to be noted, but this could not be regarded as a general tendency, because of an increase of reports on male cases in recent years.

Anxiety and fear were common to all people, but the mode of expression was influenced by culture. The Japanese way of non-distinction between self and other, different from an European analytic one, reflected on the expression of sosie in Japanese cases, where the double was derived from the same environment as the original and appeared in the patient's world of delusion bearing a name closely related to the original's name.

Sosie-naming of the original was proposed as an explanation for the pathogenesis of this delusion. This was a solution attempted by patients facing the strange atmosphere emanated from the mirage-like altered original.

Hirosaki Med. J. 37: 814—832, 1985

弘前大学医学部 神経精神科 (主任 佐藤時治郎
教授)

昭和60年3月30日受付

Department of Neuropsychiatry, Hirosaki University School of Medicine (Director: Prof. T. SATO), Hirosaki, Japan

Received for publication, March. 30, 1985

I. はじめに

不意に、予期しない場所で、知人に出会った時、我々の心の中に、どのような感情が湧き上がるであろうか？ 出会いの瞬間、様々な感情が、相手との交わりの歴史の中で甦り、それが空発的であるだけに、我々は、ただその「出会い」に圧倒され、その感情を客観的に見つめ、制御することが、しばらくできない場合がある。しかし、その「出会い」の時から一定の時間が経ち、相手との心的距離が定まり、関係が再構成されると始めて、我々はある対人的構えを取りえるようになり、一応の精神的安定をそこに見出すようになる。

その場合、もし出会った相手が、我々の予期する人と違って、その人に「よく似た赤の他人」であったとするならば、我々のこうした体験も、また、おのずと違ったものになるであろう。出会った相手が、その人に「瓜2つ」であるのに、その人ではない「他人の空似」であることが分かった時、我々は、それなりにその人との新たな心理的距離を取り、ある時は安堵し、またある時は、怒り、嘆くかも知れない。しかし、その人に対する投影的感情が次第に薄れると、我々は、ひたすら、その外観のあまりの「類似」に今度は驚ろくことになる。

このように、「瓜2つの人」に出会う体験は、我々の日常生活の対人場面においては「驚異的」出来事の1つとなる。昔から幾多の人々が印象深くかかる体験を観察してきたことが知られているが、この「瓜2つの人」に出会う体験が、精神疾患患者において起こった場合、それはどのような具現の仕方をするのであろうか？ 以下、順次、症例に即しながら、この問題を検討してみたい。

II. 文献の概観

「瓜2つの人」が、精神医学の文献に最初に登場するのは、《sosie》(瓜2つの人)と

いう単語を、その国語の中に有するフランスにおいてである。既に、1893年の V. MAGNAN, 1909年の P. SÉRIEUX, J. CAPGRAS, 1913年の R. BESSIÈRE の報告の中に、《sosie》という言葉が姿を現している³¹⁾。しかし、精神医学において、《sosie》という言葉が症候学的に明確な形で登場するのは、1923年の J. CAPGRAS と J. REBOUL-LACHAUX による慢性系統妄想病の一女性患者の症例報告による²⁾。症例M夫人は、自分の夫、子供たち、それに彼女自身が、それぞれの《sosie》により絶えず置換され、それが次第に身の回りの人たち、通行人、パリ市民全体へと遠心的に広がってゆく迫真的な妄想展開を示したが、これが、フランスの精神科医の興味を著しく喚起し、それ以後、幾多の症例報告が行われた。そして、1929年 J. LÉVY-VALENSI³⁰⁾により、J. CAPGRAS らの報告した既知の人が未知の《sosie》によって置換される現象が「Capgras 症候群」と命名され、以降、「Capgras 症候群」の報告例は、フランス以外の地にも及び、英語圏、イタリア語圏^{5,12)}で活発に研究されるに至った。

しかし、疾病分類学に重点の置かれているドイツ精神医学の影響の色濃いわが国の精神医学界では、この現象は長い間注目されることがなかった。わが国で Capgras 症候群が公けに紹介されたのは遅い時期であり、1960年の加藤²⁸⁾、笠原らの報告が最初である。その後、1964年、1967年と、荻野⁴⁰⁾、大原ら⁴¹⁾が報告を行っている。1968年の木村ら²⁹⁾、1971年の高柳⁴⁴⁾による本症候群の紹介を経て、1973年に原ら²⁰⁾が、わが国で初めて詳細な症例報告を行っている。これは J. CAPGRAS らの原著論文発表に遅れること半世紀である。これ以降、本症候群の存在は、少しずつ、わが国の精神科医にも知られるようになり、現在まで、著者の知る限りでは、26例の症例が報告されている。そのうち、症例の詳細を知り得るものは、既に著者が報告した3例を含む17例である。今回、これに新たな4症例を加え、総計

表 1 症 例

症例	性	年齢	結婚状況	診 断	著 者	年 代
1.	女性	?	既婚	精神分裂病	加藤 笠原ら	1960年
2.	女性	34歳	既婚	精神分裂病妄想型	原ら	1973年
3.	女性	33歳	未婚	?	平川	1974年
4.	女性	31歳	既婚	精神分裂病圈内の疾患	今井ら	1976年
5.	女性	20歳	未婚	精神分裂病緊張型	西丸	1977年
6.	男性	51歳	既婚	精神分裂病	西丸	1977年
7.	女性	45歳	既婚	精神分裂病妄想型	榎本ら	1978年
8.	女性	57歳	寡婦	パラフレニー	花村	1978年
9.	男性	13歳	未婚	急性妄想状態	高橋ら	1979年
10.	女性	15歳	未婚	急性妄想状態	高橋ら	1979年
11.	男性	22歳	未婚	精神分裂病	西田 奥村	1979年
12.	女性	65歳	未婚	精神分裂病	西田 奥村	1979年
13.	男性	22歳	未婚	精神分裂病	西田 奥村	1979年
14.	女性	25歳	未婚	精神分裂病	小泉	1980年
15.	女性	24歳	未婚	精神分裂病	小泉	1980年
16.	女性	26歳	未婚	精神分裂病	小泉ら	1982年
17.	女性	19歳	未婚	単純ヘルペス脳炎疑	富岡ら	1982年
18.	男性	53歳	既婚	精神分裂病	小泉	1985年
19.	男性	34歳	未婚	精神分裂病	小泉	1985年
20.	男性	46歳	既婚	精神分裂病	小泉	1985年
21.	女性	24歳	未婚	精神分裂病	小泉	1985年

21例について精神病理学的な検討を加えた。わが国において Capgras 症候群あるいは「瓜2つ妄想」として報告されたこれらの症例を、本症候群の発祥地フランスの症例と比較検討することにより、わが国における Capgras 症候群の臨床的特徴を sosie の症候学的動勢の中に探り、かつ、その発現機制についても若干の考察を試みてみた。

なお、本論文の標題を「Capgras 症候群」としないで、「瓜2つ妄想」としたのは、後述するように、わが国の症例では、フランス語圏の論文に現れるような《sosie》とは異なる、日本の解釈による「瓜2つの人」が登場するからである。

III. 症 例 の 概 観

わが国でこれまで「Capgras 症候群」あるいは「瓜2つ妄想」として報告された21例を、性、年齢、結婚状況、診断名などの項目に分けて分類したのが表1である。

わが国の全症例中、女性例は14例、男性例は7例ある。このことから女性例は男性例の2倍を占める程の圧倒的出現頻度を有していることが知られる。西丸³⁹⁾、高橋ら⁴³⁾の報告以

来、少しずつ男性症例も知られるようになってきているが、著者の自験例7例でも3例が男性例である。したがって、本症候群が女性特有のものであるという従来の知見は修正されなければならない。西田ら³⁷⁾も英語圏の症例と本邦の症例とを合わせた31例の報告で、女性例が16例、男性例が15例で性差はない、と述べている。

本症候群の発現年齢は、13歳から65歳までと広範囲にわたるが、10歳代が3名、20歳代が7名、30歳代が4名、40歳代が2名、50歳代が3名、60歳代が1名となっている。残りの1例は、年齢不詳である。発現年齢は、20歳代にピークがあり、続いて30歳代、10歳代と続いている。10歳代の症例のうちの1名は19歳なので、これを20歳代に含めれば、20歳代の発現頻度はさらに増大する。男性例7名において、その出現傾向を見ると、10歳代が1名、20歳代が2名、30歳代が1名、40歳代が1名、50歳代が2名と、その年齢ピークの特徴は不明瞭である。しかし、女性例14例(内、1例は年齢不詳)においては、10歳代が2名(内、1例が19歳)、20歳代が5名、30歳代が3名、40歳代が1名、50歳代、60歳代

がそれぞれ1名で、20歳代、30歳代に集中しており、本症状発現の年齢ピークが、男性例に比して明瞭である。

続いて、本症候群を示す基礎疾患を概観すると、単純ヘルペス脳炎疑診といった器質性精神障害例（症例17）を除けば、ほとんどが精神分裂病あるいはそれに類似した妄想産出型の内因性精神病である。このことは、フランス語圏や英語圏の症例と比較してみても共通であり、本症候群が20歳代、30歳代に多発するのは、これらの年齢層において、精神分裂病の妄想産出がもっとも活発である、という事由によると思われる。

欧米では、MARTIMOR³⁷⁾らのアルコール中毒症、HUGONENQ²³⁾の脳炎後パーキンソン病、M. J. WESTON⁴⁸⁾らの頭部外傷後遺症、G. G. HAY²¹⁾らの偽甲状腺機能低下症などの症例のほか、自験例11例中に頭部外傷1例、痙攣大発作型てんかんの1例を認めたギリシアの G. N. CHRISTODOULOU⁶⁾などの器質性病変の報告例があるが、わが国ではまだ、症例17の単純ヘルペス脳炎疑診例以外に、器質性疾患による症例は見い出されていない。

IV. 自験例の呈示

症例18. T. K. 男性、53歳。精神分裂病。秋田県生。3人同胞の3番目。父親は教員。寺の養子となり、現在は僧侶。終戦直前に師範学校を卒業し一時教師を勤めたが、その後、会社勤めに切り換えた。職場での恋愛が実らず、それが誘因となり発病。29歳の時、A市の精神病院に入院。電撃療法(E. S. T.)を受けた。41歳の時、一児を抱えた女性と結婚したが、その後も精神病院への入退院を繰り返し、現在5回目の入院中。自己像幻視、他者の二重身幻視のほか、活発な空想的内容の幻覚妄想体験を有している。51歳の7月、著者が面接した時に、自分の体験について次のように語った。「このところ母親の面会がない。自分がかつて、京都の一条院に、

天上の世界にいた頃からの育ての親であった『アイ母さん』と一緒に住んでいたが、A市の狭い家に引っ越してからは、『アイ母さん』は、女学校時代の同級生で『アイ母さん』に姿のよく似ている（傍点：著者。以下、個々の註は省略。）『ツタさん』と入れ替り、彼女の方は、どこかに姿を隠してしまった。この2人はよく似ているので、周囲では誰も気がつく人はいなかったし、私が見てもその違いは分らなかった。『アイ母さん』は、『ツタさん』に、私についての細かいことを教えていたので、私についてのことなら、『アイ母さん』と同じ位知っている。この『ツタさん』が現れた時（註：幻視像である）、両眉毛の上あたりに2つの奇妙な物が付いていたので、この人は『アイ母さん』ではない、ということが分った。霊通波（註：物理的幻覚）で聞いたところ、この人は『ツタさん』であることが分った。この人には、『アイ母さん』の持っていた優しさのようなものが欠けていたのでおかしいと思っていた。しかし、今では、その『ツタさん』も消えてしまった。『アイ母さん』は、A市のどこかにいて、自分は、その居場所を知っているが、そこは連絡のつけられない所である。教師をしていた養父（註：実際は実父）『真三』は、僧侶の『景信』と入れ替った。彼らが入れ替ったのは、私が小学生の時のことである。このため『真三』は亡くなり、『アイ母さん』は怒って『景信』を地方の小学校に左遷させてしまった。彼らの姿・形はよく似ているので見分けることは難しいが、区別することはできる。父の『真三』は、自分が誤訳しても笑わないが、『景信』の方は、誤訳すると笑う。『真三』は愛情家であり、しかも名前が良い。この病院の院長先生は亡くなった。また、副院長先生にも5か月位前から会っていない。2、3か月前に副院長先生に似た人が来たが、ゴツイ感じで、とっさに別人だということが分った。『赤垣さちお』（名前は、どういう字で書くのか分らない）

という人で副院長に似ようとした偽者であり、このことは皆に知れ渡っている。(著者に対して)先生は、本当にK先生か? A中学校を終り、A師範を出た同級生のK先生ではないか。」また、『ツタさん』のほかに「名前が分らないが、K町にいる『異なる人』は、『アイ母さん』の顔に似ようとしている。しかし、その2人には細かいところで異なる点がある。それは、分っているけれど教えられない。言えば、テレビの『ソックリさん』になりたがるので言うことができない。

『異なる人』は、愛情がなく、また意地悪であると言う。また、患者の創作した架空の子供『ムネちゃん』に似ようとする狸が顔に付いて困る」と訴える。「狐や狸が人に化けることがある。人が現れると(註:幻視像)、それが人なのか狐や狸が化けたものなのか区別する必要が出てくる。その区別は、語学や剣道のやり方を知っているかを問いかけ、ちゃんと答えられれば人、そうでなければ狐や狸が化けたもの」と説明する。この面接時、患者の母親は、脳血栓のため既に死亡していたが、そのことは患者には知らされておらず、患者は、現在も病院内で母親の幻視像と共に毎日を送っている。

症例19. T. S. 男性. 34歳. 精神分裂病. 5人同胞中の4番目、青森県の農家に生れる。中学校卒業後、外国航路の船員を7年、その後、トラックの運転手などさまざまな職業を転々とした。昭和53年10月交通事故で子供をはねて死亡させたため、1年間、刑務所に服役した。そこで精神病患者と診断されるに及んで、昭和55年2月、H市の精神病院に第1回目の入院となった。以来、精神病院の入退院を繰り返しており、昭和56年12月4日、同棲中の女性に刃物で襲いかかり、仙台中央警察署に保護され、宮城県立精神病院に措置入院となった。郷里の病院に移りたいという患者の希望で昭和57年1月7日、弘前大学医学部神経精神科に転院した。2回目の当科入院であるが、入院時には、幻聴、体感

幻覚、被影響体験、人物誤認などが執拗に訴えられていた。前主治医の入院病歴記載から「昭和55年1月に出所してから兄弟を見ても顔は兄弟の顔だが、中身は兄弟でないようだ。どこか違う。家に帰ってもよその人ばかりだ」と患者が述べていたことが分った。入院当初、主治医である著者に「知らない女の音が聞こえて来て『世の中に変装というものがあり、人の顔が変えられる』と言っている」と訴えた。また、光る大小のタコのような形をした「インヴェーダー」が見え、これが上の方から落ちて来て患者の腹の中に入ったり、宙を飛んだりして患者を操っている、と述べた。そのほか、病棟には、患者に混じってロボットがいる。それが本物の人間かロボットかを見分けなければならなくなるが、それは彼らの「歩き方」で分るといふ。本物は静かに歩くが、ロボットは歩く時、パタパタと、だらしなくスリッパで音を立てて歩くという。3月には、「皮膚科外来で世話になった皮膚科の看護婦さんが精神科にもずっといたので別の人だということが分ってきた。彼女たちは双子である」と言い出し、彼女たちの違いとしては、皮膚科の看護婦は、髪を項のところで束ねているのに、精神科の看護婦はそうでない。また、「日本にロボットをつくる会社がある」ということを教えてくれた声があったが、具体的にそれがどこにあるのか、製造されたロボットがどうなっているのかについては分らないという。4月下旬には、今まで面会に来ていた長兄を「あれは兄さんではなくて、東京で付き合っていた極道の阿部が『化けて来た』のだと女の音が教えてくれた」と言い、気味悪そうな顔をする。「あの人は面会に来てくれないし、外泊もさせてくれないので本当のお兄ちゃんではない。極道の阿部の化けた兄と本当の兄は、顔と姿が似ているので区別ができない。ただ、本当の兄はギターが弾けるけれど、偽者の兄は、ギターが弾けない(幻聴による判断)。この前に来たのはギターが弾けなかったの

で、お兄ちゃんではない。化ける人は、ドロンドロンと化けるのだそうだ」と言う。また、5月上旬には外出したついでに長兄の家に立ち寄り「インヴェーダーが来ている。俺とお前の『出』（註：出生のこと）は別だ。俺の親は、お前のとは別だ」と口走り、5月下旬には著者に「昨日面会に来たのは兄さんではなくて、極道がドロン（化けたという意味）したものだ。先生に電話しないでやって来たところがおかしい。変だと思っていたら声が聞こえて来て、阿部はずいぶん前から生きていてもう100歳以上にはなっている。このことは、『上の世界』（註：先祖の住む世界）でも問題になっている。看護婦の中にも阿部が変装させている女性がいる」と言う。その後も、このような、患者の「瓜2つ妄想」は持続し、10月上旬には、回盲部の体感幻覚、言語性精神運動幻覚、女性の幻声などが強まり、「兄さんとはどうも何かずれる。だから兄さんではない。顔は同じだけど中身はロボットだ！」と叫び、帰宅時、長兄、母などを偽者だと言って殴りかかり、長兄の懇請により、同じH市内にある某精神病院に、当科入院11か月目で転院した。

症例20. M. S. 男性, 46歳. 精神分裂病. 秋田県S町生まれ. 4人同胞の2番目. 昭和53年3月, A市の某精神病院に入院中に、次のように著者に語ってくれた。「昭和47年, 静岡の造船所に勤めていた時, 2人の子供が秋田から迎えに来たので静岡駅から汽車に乗った。しばらくすると汽車は絶壁にさしかかったが、その時、奇跡が起こり、絶壁から汽車が飛び上がり、空を飛ぶ『宇宙列車』になった。ガッタンゴットンという音がして列車がレールの上に乗ったと思ったら黒磯だった。8月5日にはS町の自宅にいて母が自分を待っていたので驚ろいた。自宅に着いてから10日間位、目を醒ますと毎日、別の星（地球）にいた。自分は遠いところにある地球に生れ、そこで成長し、結婚し、子供も生んだ。そこは、昼は日光の照るところだったが、毎

日毎日変わる地球は、石油ランプがともっている星、真っ暗な星、草ばかり生えている何もない星、『かたわ星』などであった。また、遠い地球では、カルビーの『カップエビセン』に110gと書いてあったが、今いる地球では105g+5gと書いてある。入院してから『つるさん』（註：実母のこと）が3人来た。最初の1回は、背の小さい『つるさん』、次の1回は、背の高い『つるさん』、それからは、背の中位の『つるさん』で、背丈は違うけれど皆同じ人だ。『つるさん』が来るとやはり嬉しい。着ている物は、いつも違う。また、背の小さい『つるさん』は、背の高い『つるさん』を知らない、と言っている。「S町には自分に似ている人が数人いる。ちょっと変わった人と瓜2つの人がいるが、瓜2つの人の方が圧倒的に多い。自分の生れた地球と今の地球とでは、地名は同じだが、形や高さ、地形や道路が違う。遠い地球にいた石原裕次郎には乱闘場面があったが今はなく、目つきが違う。昔の裕次郎には乱杭らんぐいがばあったが今はない。またテレビを見ていたら、私の好きな美空ひばりさんが3人出てきた。『目の優しいひばりさん』、『髪の毛のうすいひばりさん』、『黒いきれいな髪の毛のひばりさん』という風に、容貌は違うが、皆『ひばりさん』で皆好きだ。他の人たちも『ひばりさんだ！』と言っていた。「鏡を見ると、若い時の自分に似て来た」と言う。また、「以前、『あなたは予言者になることができる』と人に言われたことがあるが、ならなくてよかった」と語ったが、3年後に著者が彼に再会した時には、昭和53年に語ったことを全く忘れており、ただ無為呆然と自閉的世界に閉じこもり、著者の質問に対しても全く無関心のまゝであった。

症例21. Y. S. 女性, 24歳. 精神分裂病. 青森県K町に生れる. 6人同胞の第1子. 中学校卒業後、東京や神奈川などの紡織工場に出稼ぎに行ったが、どこもあまり長続きしなかった。昭和47年6月、19歳の時、自

表 2 「瓜 2 つの人」 (sosie) の症候学的側面

症例	対象	数	名 称, 機 能
1.	夫	5人	主人と同じ顔, 同じ姿の男たち (と5度結婚した)
2.	夫	?	妹の夫 出入りしている人 夫の友人 夫が以前世話をしていた人 ニセ者
3.	母	1回目: 1人 2回目: 複数	1回目: 私のお母さんの友人と一緒に芸者をしていた人 2回目: 近所の人 (朝鮮人, 美容師)
4.	夫	7, 8人	替え玉 (主人に最も似ているか性格が違う)
5.	母	1人	兄さんの母さんで私にとっての育ての親— —お母さん (M. Mさん) に瓜二つ—
6.	妻 (医師?)	1人以上と思われる	そっくりの替え玉がソ連から送りこまれる。
7.	夫	2人	1) 相原薫 (実在しない人物) 2) 久輪井弘先生 (実在しない人物) 〔1) は 2) の身替わり〕
8.	長男	多数	タケノリ, ヤスノリ, ヨシノリ (長男の名: タケオ) 同じ顔でタケオのふりをしている。 シル「ツコ」→性交による子供, 「シヨ」シル→人工受精による子供, 「ニ」シル→2番目の子供
9.	父母	1人ずつ	警察のまわしもの
10.	父母, 同胞達	1人ずつ	刑事
11.	父母, 一時的に弟, 祖父	各々数人 (父10回, 母2~3回)	替え玉 (何か陰謀めいた理由で送ってくる組織がある.)
12.	弟 (唯一の肉親)	?	だれか 偽者
13.	母, 弟, 院長, 看護婦の一部, 世界 (景色, 建物等)	?	別の人物 だれか 宇宙人か何か
14.	父母, 弟, 祖母	多数 (いつも違う人)	別の人 (無名): 何かの組織があるのであろう,
15.	母	1人	母親に化けた幽霊
16.	患者自身	2人	東京の女の子, 私 (青森の女の子)
17.	母 (一時的に医師, 看護婦?)	?	お母さんの姿をした別の人
18.	母, 父, 副院長, 架空の (子供)	母は複数, 父, 副院長は 各々1人ずつ, 子供は複数	父真三に「景信」が入れかわる。アイ母さんに女学校時代の友人ツタさんが入れかわる。その他「異なる人」たちがアイ母さんの「ソックリさん」になりたがる。副院長に赤垣さちおが入れかわる。子供たちにタヌキが入れかわる。
19.	長兄, 母 長兄の家族, 他患, 看護婦	数人	ロボット, 極道の阿部の化けたものあるいは化けさせたもの, 双子の看護婦
20.	母, 地球自体 患者自身	母は3人, 地球は複数, 自分は数人	母は背たけの各々違うツルさん。地球は各々違う地球。自分については瓜2つの人たち, ちょっと変わった人たち
21.	患者自身	1人	K子 (他患の名前)

自身の sosie (auto-sosie)	元の人 (original) と sosie の変換方法
—	不明
—	不明
—	1回目：不明
—	2回目：整形手術
(自己受容感あり.)	不明
—	不明
(自分の魂が別の所で、自分の体を操縦している.)	
—	入院の頃すり替わった.
+	入れ替わる (マリア様の声で分かる)
—	入れ替わる
—	変装(母親はかつらで変装)
—	変装
—	変装または整形手術
—	入れ替わった
—	変装
±	型をかぶって変装
(患者も誰かに変装する.)	
—	面をかぶって変装
+	入れ替わる.
—	不明
(3人の他人を背負っている.)	
—	入れ替わる (父, 母). 狸が化ける (子供).
(ただし、複雑な自己像幻視あり.)	
—	変装あるいは化ける
+	不明
+	入れ替わる.
(自己像幻視あり.)	

宅に戻って来たが、気分の高揚、易怒性、独語などがあったため、A市の某精神病院に1回目の入院となった。著者が最初に面接したのは、昭和52年6月で、3度目の入院の時であった。入院前夜、「自分が自分を見つめ、話しかけて来た」という、幻聴を伴う自己像幻視が訴えられ、しきりに鏡を見て「自分の顔が別人のように思える」という「対鏡症状」も1年程前から観察された。この時、患者は次のように語っている。「私は2人いる。1人が本当のY子(患者の名前)、もう1人がK子だ。私(Y子)は、入院する前にK子と入れ替った。Y子は、小さい時にK子にあやしてもらい、遊んでもらったことがある。Y子とK子はソックリだ。ところが、Y子は1m 67~8cmだったのに、K子になったので1m 55cmに縮まってしまった。Y子は18歳だが、K子になったので36歳だ。Y子は大学院卒で専門は、はっきりしないが、フランス語、ドイツ語、朝鮮語を話し、小さい頃、フランスやアメリカにいたことがあるが、K子は中学を出ただけだ。Y子には体の負傷がなかったのにK子になったので、親指の付根に傷跡、また、左の大腿の内側に注射の跡ができ、そこが引込んでしまった」

「本物のY子は、ある男の子のことをあまり好きではないが、偽者のY子(つまりK子)は、彼を熱愛し、恋愛関係を持ったことがあった。今、私は、記憶を取り戻したい。Y子の記憶が欲しい。Y子の体にK子がいる。私の住んでいた場所、働いていた場所を探して欲しい」と述べた。そのほかにも「弟は、実は、私の双子の兄である」と語るが、このことについては、深く追求されることを避けている風であった。入院病歴には、この「瓜2つ妄想」が、その後、さらに1年間程継続していたと記載されている。

V. 症例の分析

表2は、各症例についての「瓜2つの人」(以後 sosie と表記する)の症候学的側面

表 3 sosie と元の人 (original) の違い

症例 1	不明
2	不明
3	1回目入院の頃：お母さん (original) と小母さん (sosie) は背丈が似ているので勘違いした。2回目入院の頃：首筋のところが違う。どこか違う。
4	夫 (original) は東京の医者で優しい人。私によく似ている所がある。違いは、私にしか分からず、性格と、抱き上げてくれる感じと体臭でわかる。
5	違いは直感で分かった。ニセの母さんは、私より、兄さんに似ていてちょっと馬鹿だ。そして育ての親である。本当の母さんは、もっと頭がいい。
6	声の感じがちょっと違う。
7	夫と相原さん (1番目の sosie) の違いは、感じですぐわかる。
8	私には、違うのがわかる。
9	sosie は、自分をとらえに来ている。そして、その機会を窺っている。
10	父親：微妙に雰囲気が違う。母親：何となく態度がおかしい。同胞たち：刑事のようになる。
11	父：やさしくていい人だったのに、口やかましく冷たい人になった。背の高さ、爪の形も微妙にちがう。父母とも：雰囲気が何となく違う。
12	弟：顔、とくに横顔がどこか違う。左頬のホクロも以前にはなかった。どことなく親切さが違う。こまやかなところがなくなった。
13	母：前はやさしかったのに、急に男のように荒々しくなった。頭に以前にはないイボのようなものがある。看護婦の一部：美しすぎる。不自然な感じがする。
14	態度が不自然、本当の両親は、もっと強く、愛情深い。
15	不明
16	東京の女の子と、青森の女の子は、体の中で一か所だけ違いがあるが、それは言えない。
17	私のいやがることばかり言う。恐ろしい目になった。時々お母さんでなくなる。
18	母：両まゆ毛の辺あたりに2つの奇妙なものがついていた。やさしさが欠けていた。父：誤訳するとすぐ笑う (本物は愛情家である)。副院長：ゴツイ、子供：語学や剣道ができなければ狐や狸である。
19	長兄：どこか違う、ギターをひけない。先生に電話をしないで病院に来た。 他患：バタバタとだらしなく歩くロボット
20	母：背の高さが違う。自分：瓜二つの人たちとちょっと変わった人
21	自分：身長がちがいと、左大腿内側の注射の痕など

を、それぞれ、その対象、数、名称と機能、自身の sosie (ここでは、J Vié⁴⁷⁾ にならって ≪auto-sosie≫ と表記) の有無、sosie と元の人 (以後 original と表記する) の入れ替り方について、患者の陳述を基にまとめたものである。表3は、それぞれの症例における sosie と original の相違点、表4では、「瓜2つ妄想」の出現期間と随伴症状を各々抜き出したものである。

まず表2より sosie の症候学的動勢、特質を眺めてみたい。

sosie の対象は、既婚者では、症例18 (自験例) を除いてはすべて配偶者、子供では両親、母親、兄弟、また寡婦では同居している長男が選ばれるという風に、患者の身近かにいて、患者にとって情感的に最も大きな役割を果たしている対象であることが注目される。

¹⁰⁾ フランス語圏の症例と比べても、これは変わらない。また症例13では対象が母、弟のほかには病院長、一部の看護婦、それにテープレコーダーのねじ、景色、世界までに拡がり、症例18 (自験例) では、母、父のほか副院長、架空の子供にまで、また症例19 (自験例) では長兄のほか、病院内の他患たち、症例20 (自験例) では、母のほか、地球全体にまで対象が拡がっている。これも、sosie の対象がまず身近な家族から始まり、一応、妄想の舞台設定が整ってから徐々に周囲に拡散して行く際、妄想対象として取り入れられたもののようにもみえる。さらに患者自身が sosie の対象として選ばれた例は、症例7、14、16、20、21であり、そのうち症例16、21は、対象が患者のみであり、症例7、20は、対象が身近な人であると共に患者自身も置

表 4 『瓜 2つ妄想』の出現期間と他の随伴症状

症例	期 間	他 の 随 伴 症 状
1.	不明	嫉妬妄想 被害妄想
2.	約 1年 8か月	子供たちの家庭教師に対する恋愛感情表現(被愛妄想) 弟や妹の否認 幻聴 死んだ父親を生きていると思う。 独語 誇大妄想 被害妄想 色情的言辭 後に減裂思考 げん奇症状
3.	1回目入院:約11か月 2回目入院:3か月以上	第1回目:異常行動 母親に対する暴力 幻聴 第2回目:不明
4.	約 4か月	身体異和感 音響音声幻聴 幻臭 パレイドリア 易興奮性 自己変 容感 離人体験 被害関係念慮 注察念慮
5.	4回の病相期のうち各々 約10か月	非現実感 離人感 不安感情 異常行動 妄想気分 兄に対する近親 相姦的感情 減裂言語 カタレプシー 反響症状
6.	不明	被害関係妄想 迫害妄想 独語 幻聴 テレパシー体験 誇大妄想 無為 自閉傾向
7.	2年以上	幻聴 性的被害妄想 妊娠妄想 妄想気分 妄想着想 妄想知覚 関係妄想 被愛妄想(夫の替玉に対する)
8.	3年以上	空想的対話(独語) 言語新作 異常行動 幻聴(?)
9.	父:約半月 母:父におけるよりも3日 長い	非現実感 離人感 罪責感 恐怖感 (再発の時) 妄想気分
10.	約 2週間	孤立感 離人症 注察念慮 罪責感
11.	4, 5年以上	被害妄想, 追跡妄想
12.	1回目入院の頃:約 2年 2回目入院の頃:約 9か月	抑うつ 幻覚 妄想 弟に対する罪責感
13.	4か月以上	妄想気分 幻聴 被害関係妄想 作為体験
14.	約10日	幻聴 既知体験 被害関係妄想 不安 無為 空笑
15.	不明	幻聴 世界没落体験 嫉妬妄想 被害妄想 被害関係妄想 思考奪取 影響妄想 精神運動興奮 自己臭妄想 妄想気分
16.	5年	幻聴 誇大妄想 血統妄想
17.	約20日間	幻聴 自己重複体験 疎遠感情
18.	半年以上	幻聴 テレパシー体験 自己像幻視 他者の二重身幻視 迫害妄想 誇大妄想
19.	3年以上	幻聴 体感幻覚 内的対話 ときに幻視
20.	約 2, 3年	対鏡症状
21.	約 1年	対鏡症状 自己像幻視 幻聴 独語

き換えられている。症例14は、家族に変装して来る人たちがいるほか、患者自身も他人に変装するものである。

次に、sosie の数について検討してみる。表2から分るように、不明のものが4例程あるが、自身のみ sosie の出現する症例16, 21を除くと複数の sosie の登場する症例が11例、sosie が1人しか出現しない症例が5例あった(症例18では、ある対象においては単数、他の対象においては複数であったので、集計の中には入れなかった)。これから、2倍の症例において sosie が複数であることが認められる。また、表4から、慢性化している症例では、sosie は複数であるが、急性期

症例では単数であることが分る。症例9, 10では、妄想は、それぞれ、約半月あるいは約2週間で消失するという急性例であり、妄想そのものが成熟、体系化しなかったため、sosie が複数化しなかったものと考えられる。一方、多数であると見做される sosie は、それぞれ、同じ顔、同じ姿をしてはいるものの、同じ sosie なのか、また違ったものなのかという疑問が生ずる。症例1の「主人と同じ顔、同じ姿をした男たちと5度結婚した」、症例6の「妻とそっくりの替玉がソ連から送り込まれる」、症例11の「父母の交替は何度も生じ……両親を送ってくる組織があるのではないかと述べられているが、ここ

ではまだ *sosie* たちの異同は不明である。しかし、症例8の「同じ顔だけど人は入れ替り立ち替り違っている」、症例20の「背の小さい『つるさん』、背の高い『つるさん』、背の中位の『つるさん』が来る」という表現から、これらの症例では、それぞれの *sosie* は、皆違っていることがわかる。症例11の「今の両親は、これまで替わった親の中で最も良い」というところから、それぞれ異なった *sosie* の中でも、患者が *sosie* を選り好みすることがあるということも分る。この点¹⁰⁾については、フランスでも J. COURNUT が既に指摘している。

フランスの *sosie* の特徴の1つである「多数性」⁴⁷⁾ *multiplicité* は、以上のことから、わが国の *sosie* においても認められることになるが、「無名性」についてはどうであろうか？フランス語の原義から見れば、*sosie* と *original* との間では、血縁関係も交友関係もない。赤の他人である「他人の空似」が原義に近い。この点に留意して、わが国における *sosie* の名前、その機能について見て行くと、症例2では「妹の夫、夫の友人、夫が以前世話していた人」、症例3では、1回目入院時は「お母さんの友人と一緒に芸者をしていた人、よその小母さん」、2回目入院時は「近所の人で朝鮮人、美容士」、症例5では「兄さんの母さん、私にとっての育ての親」、症例7では、現存しないが患者の身近かにいる人の名前を多少変形して「夫の従弟で福岡で英語教師をしている相原薫さんが(夫と)見合の時に入れ替ったが、この人は自衛隊のお医者さんの久輪井弘先生の身替り」という具合に、夫に対する2人の *sosie* を創造している。症例18(自験例)では、「アイ母さんは、女学校時代の同級生のツタさんと入れ替ったが、この人は、アイ母さんから聞いて、私についてのことなら、アイ母さんと同じ位知っている。父の真三は、僧侶の景信と入れ替った。このため、真三は亡くなり、アイ母さんは怒って、景信を地方の小学校に左遷し

た」という風に、本邦の症例においては、*sosie* は、何らかの形で *original* と「近い関係」にある。そして、お互いに連絡を取り合ったりして、患者の細かいことまで知っているのだから、*sosie* 形成の³⁸⁾説明概念として *original* の「分割」機制 *splitting* が想定され得る。また、*sosie* は、*original* の住む生活空間に同居し、そこから患者の妄想世界に立ち現れる。フランス語の *sosie* は元来、*original* とは赤の他人であるから、その出生、由来は不明であり、従って、*original* と同一の生活空間から出現するものではない。わが国の報告においても、例えば症例1, 6, 8, 11, 13, 14, 15, 17などがその例であるが、大勢を占めるまでには至っていない。また症例2の「近所の人たちが整形手術をしたのかも知れない」、症例9の「父や母は、実は警察の廻し者が変装している」、症例10の「お母さんと同じ顔をしているが変装をしているだけ」、症例11の「両親は変装しているか整形手術によって姿かたちをそっくりに変えた替玉」、症例13の「宇宙人が母に変装している」、症例14の「型をかぶった変装」、症例15の「母親に化けたお面をかぶった幽霊」、症例18(自験例)の「狸がムネちゃんに似ようとする、狐や狸が人に化けることがある、異なる人は、アイ母さんの顔に似ようとする」、症例19(自験例)の「兄さんに極道の阿部が化けて来た、看護婦の中にも極道の阿部が変装させた女性がいる」と述べているところからみて、本邦の症例では、かなりの頻度で、お面やかつら(あるいは不明の変装技術)をつけて変装したり、手術を受けたりして *original* に姿・形を似せようとしたり、民話にあるような狐や狸が *original* に化けるなどの手段が見られる点が注目される。*sosie* は元来、変装したり、化けたり、手術を受けたりしなくても、*original* に似ている生身の人間であるから、これらは本来の意味では、*sosie* とは言えないであろう。症例1の「主人と同じ顔、同じ姿をした男たち」、症例4の「替

玉、主人に最も似ている」、症例6の「そっくりの替玉」、症例8の「同じ顔で……」、症例12の「だれか、偽者」、症例18(自験例)の「異なる人」、症例20(自験例)の「背丈の違う3人のつるさん、私と瓜2つの人と、ちょっと変わった人」などの例は、ほぼ sosie の原義に近いと言える。ただ、症例19(自験例)の「ロボット」についてはそれが、original と姿・形は似ているものの、生身の人間ではないから、本来の sosie とは言えない。また、この症例においては「双子の看護婦」が登場するが、このように血縁関係が語られる場合は、厳密には sosie と見做すことはできない。著者は、かつて、日本語の語彙の中から、フランス語の sosie に相当する言葉として、二重身(double)との比較において、「瓜2つの人」、「酷似の人」、「他人の空似」、「そっくりさん」、「替玉」などの表現を取り出した。³²⁾ わが国の症例では、症例4、6、11で「替玉」という呼称が使用されており、「ソジーの錯覚」illusion des sosies という CAPGRAS らの原著論文の標題も、わが国では、「替玉妄想」という訳語によって紹介されているが、「替玉」という用語は、「替玉受験」、「替玉選挙」といった具合に、original との間の外観の類似よりも、むしろ、役割の類似の方に力点が置かれている。また症例18の「異なる人は、アイ母さんの顔に似ようとしている……2人には細かいところで異なる点がある……言えば、テレビの『ソックリさん』になりたがるので……」という表現が、患者によって自発的に語られたことは、きわめて示唆的である。患者自身も言うように、「ソックリさん」という表現は、むしろテレビ文化的な表現といえるもので、物真似番組の氾濫している現代のテレビ情況に、患者は素早く反応し、自身の妄想世界にこれを取り入れている。また、「異なる人」がアイ母さんに「似よう」とする、という表現から、保崎、浅井らの採用した「酷似の人」²⁴⁾ という表現が再評価されよう。症例20の「自分

と瓜2つの人と、ちょっと変わった人がいる」というように、外観の完全に似ている人を「瓜2つの人」、少し違うがほぼ似ている人を「ちょっと変わった人」といった具合に、患者自身が「人物の類似性」に対して、その表現に苦心している例がある。しかし、症例5では、否認された実母と、本物の母親と見做された母方伯母とが、患者によって「瓜2つ」と表現されてはいるものの、この2人は、実の姉妹で血縁関係にあるためフランス語本来の sosie とは言えない。このため、sosie に近似と著者が見做した「瓜2つの人」³²⁾ という日本語の表現も、血縁関係のない³⁴⁾ 瓜2つの人という風に、限定句を施す必要が生じてくる。

次に、患者の妄想世界に立ち現われた sosie によって置換された original の行方を追ってみたい。症例1では「真の夫は患者の前に姿を現すことはない。夫以外の男性はすべて宝塚の男装の麗人にすぎない。時には、主治医が『夫の仮装者』である」、症例4では、現実の夫(original)は、理想化された形で「東京の医者で東京弁を使う、主人が何人か見える中に私の兄がいます(現実には兄はいない)」という風に変貌し、症例6では「妻は、私の入院前に国連の秘密警察本部でかくまっています」、症例16では「東京の女の子かM子(のどちらか)は、今はどこの国かはっきりしませんが外国籍になっている」、症例18では「アイ母さんは、A市のどこかにいる。居場所を知っているが連絡のつけられない所」という風に、理想化されたり、また、患者の手の届かない所で安全に保護されたりしている。症例2では「本当の夫は……同じ場所でどこかにひそんでいる」、症例3では「お母さんが……どこへ行ったのかわからない」という具合に、original の行方が分らないことが一般的である。しかし、症例12では「本当の弟はこの世にいないに違いない」、症例13では「本当の母は死んでしまったか、地球上のどこかで苦しんでいるに違

ない」という風に、original の不幸な運命が語られる場合もあり、前述の症例1, 4, 6, 16, 18のような、楽観的な original の行方想定は、一面的である。また、症例6では「(妻の居場所は) 知ってるけど教えませんよ」、症例18では「居場所を知っているが、そこは連絡のつけられない所だ」という具合に、original の行方を患者が知っていて、その運命もまた妄想世界の作者である患者たちの心理的動向に依存しているように見える場合もある。

患者によって表現された original と sosie の間の相違が非常に微妙であることは、かねてから指摘されているところであるが、H. DIETRICH¹¹⁾ の「近似的同一性」Nahezuidentität という表現が最も的確であろう。わが国におけるこの種の表現は、表3にある通り多彩であるが、違いが「感じ」で分るというのが大部分である。例えば、症例4のように「抱き上げてくれた感触、体臭」で、症例6のように「声の感じ」で分ったり、症例10, 11のように「雰囲気」で分るというものもある。症例13, 14では「(sosie が) 不自然だ」と感じている。また、この「微妙な差異」を患者が知覚的に把握、表現している場合もある。例えば、症例3の「首筋のところが違う」、症例11の「背の高さ、爪の形も微妙に違う」、症例12の「左頬のホクロも以前はなかった」、症例13の「頭に、以前にはなかったイボのようなものがある」、症例16の「体の中で一箇所違いがある」、症例18の「母の両眉の上あたりに、2つの奇妙なものが付いていた」、症例20の「背の高さが違う。(自分と) 瓜2つの人と、ちょっと変わった人」、症例21の「身長は1 m 67,8 cm だったが、1 m 55 cm に縮まった」などである。また、この差異は、情感的な面においても気づかれており、症例4では「本当の主人は優しい」、症例11では「父はやさしくていい人だったのに、口やかましくて冷たい人になった」、症例12では「(弟は) どことなく親切さが違

う。こまやかなところがなくなった」、症例13では「母は、前はやさしかったのに、急に、男のように荒ら荒らしくなった」、症例14では「本当の両親は、もっと強く、愛情深い」、症例17では「私の嫌がることばかり言う」、症例18では「母にはやさしさが欠けていた、副院長はごつい」と受け取り、いずれも対象の性格の変化を嘆いているが、このほかにも症例18では「本当の父親は、誤訳しても笑わないが、そうでないのは笑う。(架空の) 子供は、語学や剣道のやり方を知っていて、ちゃんと答えられるが、子供に化けた狐や狸は答えられない」、症例19では「本当の兄はギターを弾けるが、化けて出て来た方は、ギターを弾けない」というように、態度や行動、能力によって両者を区別している。症例18では、患者自身、両者の区別に困り、これらの相違点を利用して鑑別試験すら行っている。

ところで、1927年、P. COURBON⁷⁾ らによって、特定の人によって多数の人が変装させられる、いわゆる「Frégoli 変装錯覚」の症例が報告されたが、これは、わが国の症例では、症例7と19で観察される。また、1932年には、やはり、P. COURBON⁹⁾ らによって、患者の身の回りにいる人たちが互いに変装し合う「相互変装錯覚」Illusion d'intermétamorphose が発表されているが、わが国の症例では、宝塚劇団の仮装が妄想世界に取り入れられている症例1が、これに該当する。

次に original そして、これと入れ替った sosie に対する患者の心理について述べることにする。患者は、通例、sosie に不満や憎悪をぶつけ、そのために、original はかえって理想化され、愛着の対象となっていることが、各症例から肯定されるが、さらに詳細に患者の心理を検討すれば、この図式は必ずしもすべて当てはまらない。例えば、症例5は、木村²⁹⁾の「家族否認症候群」に類似したものであり、実母を否認し、伯母を実母と見做すものであるが、身内である伯母が、血縁

者である実母と *sosie* であるということは、フランス語の原義からは、あり得ないことである。症例11においては、時として *sosie* にも *original* と同等の感情的価値が付与されており、症例7においては、夫の2人の *sosie* の方が *original* よりも患者に対して感情的により近い存在となっており、従来の「*original* は善玉で *sosie* は悪玉である」という見解に反する臨床的事実であり、軽視できない点である。

VI. 考 察

人間の不安や苦悩に対する基本姿勢は、洋の東西を問わず、変わらないが、欧米人の分析的・合理的思考形態と比較される「自然に帰する」ということばで代表される日本人の自他合一・未分離の全体的思考形態が、「瓜2つ妄想」の表現面で、どのように反映されているかを、*sosie* の症候学的動勢の中に探り、かつ、「瓜2つ妄想」の発現機序について若干の考察を加えたい。

sosie の対象は、患者にとって感情的に最も近い人物が選ばれ、その数は、半数の症例において複数であり、それぞれの *sosie* は、相異なっている。わが国の症例においても、3分の2は、*sosie* に名前がない（たとえば、「替玉」、「誰か」、「偽者」、「ロボット」等）。この点は、フランス本来の *sosie* に近いといえる。しかし、これらの症例においても、*sosie* は、「ソ連から送られる」、「何らかの組織から送られる」、「宇宙人が変装して来るのだろう」、「日本にロボット製造工場がある」といった風に、*sosie* の生起、由来する空間が、患者によって、それなりに位置されている。また、わが国では、*sosie* が形成されるために、幽霊、狐、狸などの民話、伝説的化身、変身に始まり、仮面やかつらなどの小道具を使った変装や、形成外科手術に代表される最新医療技術、または、ロボット、宇宙人などに象徴される先端科学技術および SF 的想像物に至るまで、多様な解

釈手段が取られている。

しかし、わが国では、*sosie* の特徴を明瞭に呈示する症例は、全例中3分の1にすぎず、しかも、*sosie* は、個々に名前を有し（従って単数である）、*original* と何らかのつながりを持ちながら、*original* の幻影あるいは分身として、*original* と同一の生活空間から患者の妄想世界内に登場する。これは、フランスの *sosie* が持つ、個性性、他者性を具備しているが故に *original* と融合されることはなく、かつ、外見的類似性のために *original* と代替することが可能であるといった特徴とは明らかに相違している。これにひきかえ、わが国の *sosie* 症状の特徴は *original* との間の身体的、精神的な分離が不明瞭で、*original* に対して、個性性、他者性を持つことがなく、*original* との交替も容易ではないということである。これは、「内と外」、「他者と自己」を明確に区別するフランス人の合理的、分析的思考形態に対する日本人の「内と外」、「他者と自己」における未分離かつ非合理的、全体的思考形態の、*sosie* への投射であると考えることができよう。

症例7と症例20（自験例）は、他者の *sosie* のほか、自己自身の *sosie* が存在する例であり、1923年の J. CAPGRAS らの論文²⁾、1956年の B. FREY らの論文¹⁵⁾、1931年の E. LARRIVÉ らの論文³⁵⁾にも同様の症例が見られる。妄想が自己自身にまで及んでいることから、妄想城府 *Wahngebäude* を思わせるものである。E. LARRIVÉ らの症例では、自分自身が「二重化している」(*doublée*) という男たちの声をケーブルカーの中で幻声として聞いているのであるが、これが、自分自身の *sosie* つまり *auto-sosie* なのか、それとも「二重身」*double* なのかは詳細は不明である。かつて著者の報告した症例16と症例21（いずれも自験例）では、「瓜2つ妄想」は、患者自身にのみ関わりを持つものであった。症例16では、入院しているのは、患者であるM子ではなく、「青森の女の子」であ

り、この子は、「瓜2つ」の「東京の女の子」の代わりに入院してあげたのである、と述べられている。この「東京の女の子」も、やはり、その子と「瓜2つ」である青森県T村出身のM子と東京の歯科医院で入れ替ったものである、という「自己の二重の転換」を経験している。また症例21（自験例）は、かつて入院していた当時、一緒に在院した他患K子に自己自身を投影し、自分をK子だと思ひ込み、お互いに「瓜2つである」という具合に、身体面の類似性を主張した症例である。症例16では、「青森の女の子」という現在の患者自身から未来の患者自身へと向う。願望充足的に改変された自己像と、「東京の女の子」という東京時代の自身の影を宿す現在から過去へと向った自己像の2つに分割されている。症例21（自験例）は、自己を否認し、自分の姿を他患の姿の中に投影して、空想的に類似させ、外見的にも能力的にもより良い要素をこれに付着させた「願望充足的な自己像」である。すなわち、前者は自己像の分割、後者は自己像の拡散、融合と解釈される。「自身の瓜2つの人」(auto-sosie)は、「二重身」(double)との異同が常に問題となる領域であるが、前者の場合は、自己像の分割ということからも推察されるように、「多重人格」との異同が問題となる「領域の広がり」を示唆している。一方、症例21（自験例）では、入院前に、自分を見つめ、語りかけるもう1人の自分を見たという「自己像幻視」héautoscopie が出現しているところから、「自身の sosie」と「二重身」(double)とが関わっていると考えさせられる症例である。F. HERTZは、患者自身についてのみ、4人の sosie がいる症例を報告した。そして、これは、sosie の体裁を借りた「二重身」(double)の「具現」であるという解釈をしているが、著者の抱く上記の疑問に対する1つの解答であろう。また、さらに症例18（自験例）では、自分の目の前に現れた母親の幻影を見て、「自分の母だ」とは思うが、その

両眉の上に2つの「不気味なもの」を認め、「母に似て非なるもの」と確信した症例である。かかる「幻影」に対する Capgras 症候群については、過去に報告を見ていない。この症例においても、自己像幻視と他者の二重身幻視 (Deuteroscopie)¹⁶⁾が見られている。^{17,44)}この意味では、英米圏あるいはドイツ語圏の症例に見られる「二重身」要素の混入した「瓜2つ妄想」を本症例においても想定することが可能である。

家族否認妄想と瓜2つ妄想との相違について述べると、家族否認妄想においては、家族と患者の間の血縁関係が否認されるだけであり、対象となる家族の「同一性」そのものは否認されていない。ところが、「瓜2つ妄想」の場合は、対象の「同一性」そのものが否認されていることにその本質がある。従って、前者よりも、患者にとって、より深刻、より重大な事態であるように見える。家族否認妄想の場合でも、否認される対象が肉親の場合、わが国独自ともいえるいわゆる「橋の下から拾われて来た子」という棄子のテーマが、日本人の意識の古層の中で「もらい子妄想」として結実し、実の親を「育ての親」と見做し、一方、自分を「哀れな捨て子」と思ひ込んで、感傷的な気分を自らに滲透させる。しかし、家族否認妄想でも、その否認対象が配偶者である場合は、「もらい子妄想」とは一線を画しており、たとえば、「列車で隣席に座っていた若い男が、まだ見ぬ真の夫Yであり、(現実の)夫は、このYの影武者でしかない」という木村ら²⁸⁾の既婚婦人の症例(第3例)が示すように、「瓜2つ妄想」に類似してくる。

これまで、「瓜2つ妄想」の発現機序として、疎遠感情⁴⁾、離人症⁴⁴⁾、両価性¹³⁾、太古的思考 coenesthésie⁸⁾の欠如⁸⁾、エディプス・コンプレックス³⁾、器質性⁴⁶⁾などの諸因子が取り上げられてきたが、著者の見解を以下に述べてみたい。

まず表3を概観することにより、本症状の

随伴症状として、自己変容感、離人体験、非現実感、妄想気分、不安などの多いことが見てとれる。また、前章で取り上げたように、original と sosie との間の相違を特徴づけるものとして「微妙に雰囲氣的なもの」があげられる。また対鏡症状、自己変容感、自己像幻視、誇大妄想、血統妄想など自我意識と強く関わっている諸症状も認められる。

ところで著者は、まず、否認され、sosie によって置換される対象が、患者の身近かな人物であるという事実を重視したい。この症状が「相貌失認」のような知覚領域の障害*²⁾に帰せられるべきではなく、J. CAPGRAS らが、最初の論文において明確に述べているように、「情感的判断の結論」(conclusion d'un jugement affectif) であると考え、他者は、我々の外にあるのと同様に、我々の内なる存在でもある。かつて体験した他者の「本質」属性は、我々の内部に何らかの形でその刻印を残すが、我々がその他者自身に再会した時、あるいは、ただその人を思い浮かべるだけでも、その他者の「本質」属性は、我々に働きかけ、その人を正しくその人自身として認識させるものとする。表3において認められる妄想気分、不安、離人感が圧倒的に患者を包み込み、患者の内部へと侵入する時、患者に刻み込まれた他者の「本質」属性が危機に晒され、何らかの修正を迫られるまでに揺り動かされるならば、患者は、疑惑、不信、恐怖の感情を伴って圧倒する異様な雰囲気の中に「島」のように浮かび上る対象を眺め見るであろう。かくのごとく、時間と空間が深刻に変質している妄想世界では、圧倒的な「雰囲気の異様さ」が、対象の「本質」属性を無力化し、同時に、患者の主体性をも侵害する。そして、患者にとって情感的に深

く関わってきた対象の「本質」属性の無力化は迫害的相貌化を呈し、かかる情況に患者は耐えることができなくなる。この対象の異和感、圧迫感が強い場合、対象に対する知覚変形を招来させる。これこそ、対象の「背の高さの違い」、「イボの有無」と患者が表現するところのものである。この、外見こそ類似はしているが、その実体を欠いた対象、つまり、「曇気楼¹⁰⁾」化した original から発散される異和感に対する患者の一つの解決方法が、対象の「sosie 命名作用」であると考えられる。つまり、患者は、変質した original の発散する異和感に耐えられず、これを、姿・形の類似した sosie によって「置換させる形式」を取ることで、ひとまず心理的安定をはかろうとするのである。こうして、original は、sosie からの反映を受けながら、ますます強く患者によって意識され、sosie のおかげでその個性性、他者性、社会性、情感性を保続することができるのである。患者の周りを取り囲み、患者の内部へと侵入する、この雰囲氣的な妄想気分は、患者をたやすく別の次元、別の世界へと転送する、あるいは、ひきずり込む。それは、例えば、「二重身」の暗躍する未開の世界であったり、互いに仮装、変装しながら舞い踊り合う仮面舞踏会であったりする。また、それは、いかなる医学的手段も可能であり、また、いかなる精巧なロボットもいかなる精密機械をも製造することが可能な、高度に科学技術の発達した未来の世界であると同時に、狐や狸が人を化かすという蒼古的な民話、お伽話の世界でもある。そこでは、兄と結婚することも、父と交わることも許される、タブーのない、神話的な世界、土着的な、失われた故郷が現出する。かかる世界においてのみ、患者は、魔術的な力を獲得し、対象の二重化、分割、変装、手術などの様々な行為を実行することが可能となるのである。

つまり、「瓜 2つ妄想」機制の本質は、対象に対する、この「sosie 命名作用」であ

* 脚註。「器質性」の問題についても、これが本症状を発生させる直接的な原因というよりは、まず情感的体験レベルに作用し、そこから2次的に本症状を発現させる「力動」が揺り動かされるのであると著者は考える。

り、この命名時に、フランスでは *sosie*、わが国では、狐や狸、変装、手術、ロボットといった、それぞれの国の文化・社会的影響の色濃い登場人物が出現するのである。そして、一度この *sosie* の魔術を手にした患者は、容易にこの況縛的世界から脱け出すことができなくなり、妄想世界に固着し、妄想は慢性化して行く。つまり、患者は、*sosie* の仕掛けたワナにその主体性を奪われるのである。

従って、各症例に見られる自己変容感、対鏡症状などの自我障害の指標は、対象の変貌が、実際は、患者自身の変貌の反映にほかならないことを示す傍証である。

最後に注目しておきたいことは、既婚婦人が夫を「瓜2つの人」*sosie* に置換してしまう例である。症例7では、患者が夫の *sosie* と仲睦まじい夫婦生活を送っており、症例4では *original* を改変し、東京の医者、また、実在しない兄と見做して仲良く暮し、症例1では、姿を消した *original* の夫を主治医に変装させる、といった具合に、夫婦間の情愛を彼女たちなりの形で保存している。既婚婦人の「瓜2つ妄想」¹²⁾については、イタリアの B. DISERTORI らが、「夫の *sosie* と罪意識のない不貞を働いた」と患者が思う場合、これを「アルクメーネ**・コンプレックス」*complesso d'Alcmena* と名づけることを提唱している。このような、独自の位置を与えられた、性愛を基盤とする既婚婦人の、夫に対する不満と愛情欲求が、かかる精神症状を惹き起こすことは、「瓜2つ妄想」の中で、アルクメーネ・コンプレックスが特別な意味を持っていることを示唆する。実際、症例7は、敬虔なクリスチャンであるので、不貞に対する罪悪感も人一倍強いものと思われるが、かかる罪の意識からの解消が *sosie* 形成

を作用させた、ということができよう。症例2は、子供の家庭教師K氏への恋愛感情がまず先行し、ついで、夫の否認がこれに続いたものであるが、K氏への恋情が強く先行していたため、アルクメーネ・コンプレックスには至らなかったものと解釈される。木村らの家族否認妄想の中でも、前述のように、否認対象が配偶者、とくに夫の場合には、その心理機制が、アルクメーネ・コンプレックスにより近づいてくる。

以上、わが国の症例において観察された「瓜2つの人」*sosie* の特徴を、フランス例と対照しながら、日本人心性との関連において述べ、また、「瓜2つ妄想」の発現機序についての解釈をも試みた。さらに、「瓜2つの人」*sosie* と「二重身」*double* との関係、「瓜2つ妄想」と「家族否認妄想」との関係、アルクメーネ・コンプレックスの「瓜2つ妄想」圏内での位置について言及した。

VII. 結 語

わが国における「瓜2つ妄想」(Capgras 症候群)について、既に報告された17例(うち自験例は3例)に、新たに4例を加え、21例について、「瓜2つの人」*sosie* の特徴について検討した。*sosie* という言葉が表現するものは、フランスを中心とする地中海文化の土壌によって育かれた文化果実³¹⁾であり、「二重身」と混同される英米圏の *double* と、ドイツ語圏の *Doppelgänger* とも異なった概念であり、不気味さや「対象と相互に所属しあう」不安¹⁰⁾とは無縁のものである。わが国における *sosie* 症状も、独自の形をとり、フランス経由の概念ではない為、*sosie* の持つ本来の自由さ、明晰さが欠如したまま妄想世界に出現している。しかしながら、「瓜2つ妄想」の発現には、文化、社会の枠を越えた共通する部分があり、文化の差はあく迄も表面的なものである。人間の不安や苦悩に対する基本姿勢には、多くの共通部分があることが、本研究においても示唆されたと

** 脚註. アルクメーネ. ミケナイに生れた伝説上の姫君. 戦場にいるテーバイの將軍である夫アンフィトリオンに変装したジュピターを、夫と信じ、肉体的に交わった。

いえる。

稿を終るに臨み、御懇切な御校閲を頂いた佐藤時治郎教授に深謝致します。

(なお、本論文の要旨は、第36回東北精神神経学会(秋田・1982)において発表した。)

文 献

- 1) BOUVIER, M. : Le Syndrome "Illusion des Sosies" Thèse, Paris, 1926.
- 2) CAPGRAS, J. et REBOUL-LACHAUX, J. : L'illusion des «Sosies» dans un délire systématisé chronique. Bull. Soc. Clin. Méd. Ment., II : 6-16, 1923.
- 3) CAPGRAS, J. et CARRETE, P. : L'illusion des sosies et complexe d' Oedipe. Ann. Méd. Psychol., 82 : 48-80, 1924.
- 4) CAPGRAS, J., LUCCHINI, P. et col. : Du sentiment d' étrangeté à l'illusion des sosies. Bull. Soc. Clin. Méd. Ment., 12 : 210-217, 1924.
- 5) CARGNELLO, D. et DELLA BEFFA, A. : L'illusione del sosia. Arch. Psicol. Neurol. Psychiat., 16 : 173-201, 1955.
- 6) CHRISTODOULOU, G. N. : The Syndrome of Capgras. Brit. J. Psychiat., 130 : 556-564, 1977.
- 7) COURBON, P. et FAIL, G. : Syndromed' "Illusion de Frégoli" et schizophrénie. Bull. Soc. Clin. Méd. Ment., 15 : 121-125, 1927.
- 8) COURBON, P. et TUSQUES, J. : Identification délirante et fausse reconnaissance. Ann. Med. Psychol., 90 : 1-12, 1932.
- 9) COURBON, P. et TUSQUES, J. : Illusion d' intermétamorphose et de charme. Ann. Méd. Psychol., 90 : 401-406, 1932.
- 10) CURNUT, J. : A propos de l'illusion de sosie. Entret. Psychiat., T. 12 : 159-181, 1966.
- 11) DIETRICH, H. : CAPGRAS' Syndrom und Déjà-vu. Fortschr. Neurol. Psychiat., 30 : 617-625, 1962.
- 12) DISERTORI, B. et PIAZZA, M. : La sindrome di Capgras o illusione del sosia. Il complesso d' Alcmena. Gior. Psychiat. Neuropat., 95 : 175-185, 1967.
- 13) ENOCH, M. D. : The Capgras Syndrome. Acta Psychiat. Scand., 39 : 437-462, 1963.
- 14) 榎本貞保, 松下兼介, 他 : Capgras 症候群を呈した精神分裂病の1症例. 精神医学, 20 : 265-269, 1978.
- 15) FREY, B., MAUREL, H., et col. : Sur une observation d'illusion de sosie. Ann. Méd. Psychol., 114 : 891-896, 1956.
- 16) 藤縄 昭 : 自己像幻視とドッペルゲンガー. 臨床精神医学, 5 : 73-84, 1976.
- 17) GLUCKMAN, L. K. : A case of Capgras Syndrome. Aust. N. Z. J. Psychiat., 2 : 39-43, 1968.
- 18) HALBERSTADT, G. : Syndrome d' Illusion des Sosies. J. Psychol. Norm. Path., 20 : 728-733, 1923.
- 19) 花村誠一 : Capgras 症状群に関する言語理論的考察—ルイス・キャロルにならいて—. 臨床精神医学, 7 : 1441-1449, 1978.
- 20) 原 俊夫, 佐藤喜一郎, 他 : Capgras 症候群の1例. 精神医学, 15 : 1193-1201, 1973.
- 21) HAY, G. G., JOLLEY, D. J. : A case of the Capgras Syndrome in association with pseudo-hypoparathyroidism. Acta Psychiat. Scand., 50 : 73-77, 1974.
- 22) HERTZ, F. : Délire de Sosie. Thèse, Reims, 1977.
- 23) 平井佐喜 : Capgras 症候群を呈した1症例. 臨床精神医学, 3 : 388-393, 1974.
- 24) 保崎秀夫, 浅井昌弘 : 記憶の障害 現代精神医学体系(懸田克躬, 他編), 第3巻A ; 精神症状学I, 125-165, 中山書店, 東京, 1978.
- 25) HUGONENO, H. : Illusion des sosies et maladie de Parkinson post-encéphalitique. Ann. Méd. Psychol., T. II : 439, 1969.
- 26) 石福恒雄 : 二重身の臨床精神病理学的研究, 精神経誌, 81 : 33-61, 1979.
- 27) 今井英彦, 尾石金蔵, 他 : Capgras 症候群の1症例, 精神医学, 18 : 535-541, 1976.
- 28) 加藤 清, 笠原 嘉, 他 : 精神分裂病者におけるいわゆる「人物誤認」について, 精神経誌, 62 : 748, 1960.
- 29) 木村 敏, 坂 敬一, 他 : 家族否認症候群について, 精神経誌, 70 : 1085-1109, 1968.
- 30) KLEMPPEL, K. : Über Personenverkenennung nach dem Muster des sogenannten Capgras Syndroms und verwandte Phänomene. Psychiat. Clin., 6 : 17-29, 1973.

- 31) KOIZUMI, A. : Illusion des Sosies au Japon — Rapport avec des cas d' Occident — Mémoire, Paris, 1980.
- 32) 小泉 明: ソジー (sosie) の概念をめぐって — Capgras 症候群の理解の一助として —, 臨床精神病理, 2 : 117-132, 1981.
- 33) 小泉 明, 佐藤時治郎, 他: 家族否認を伴い, 自己の二重の転換を生体とする「瓜 2 つ妄想」の 1 症例, 精神経誌, 84 : 383, 1982.
- 34) KOIZUMI, A. : Syndrome de Capgras au Japon. Rapport avec des cas occidentaux. L'Evol., Psychiat. T. 49 : 163-178, 1984.
- 35) LARRIVÉ, E. et JASIENSKI, H. J. : L'illusion des Sosies. Une nouvelle observation du Syndrome de Capgras. Ann. Méd. Psychol., 89 : 501-507, 1931.
- 36) LÉVY-VALENSI, J. : L'illusion des sosies. Gaz. Hôp., n° 55 : 1001-1003, 1929.
- 37) MARTIMOR et JOUANNAIS : Un cas d' illusion de sosie. Polynévrite et sclérose médullaire chez une alcoolique. Ann. Méd. Psychol., T. I : 785-791, 1939.
- 38) 西田博文, 奥村幸夫: Capgras 症状と継子妄想, 精神経誌, 81 : 649-665, 1979.
- 39) 西丸甫夫: Capgras Syndrome およびその近縁症状群の精神病理的考察 —急性精神病・慢性精神病の病状因分析による比較を中心—to — 愛知医科大学医学会雑誌, 5 : 292-306, 1977.
- 40) 萩野恒一, 大原 貢, 他: Capgras 症状群について, 精神経誌, 66 : 601, 1964.
- 41) 萩野恒一, 大原 貢, 他: カブグラ症状群について (第 2 報). 精神経誌, 69 : 1184, 1967.
- 42) PAULEIKHOFF, B. : Die zwei Arten von Personenverkennung. Fortschr. Neurol. Psychiat., 22 : 129-138, 1954.
- 43) 高橋俊彦, 本城秀次: 瓜 2 つ妄想についての一考察 —思春期発症の 2 症例を通して—. 精神医学, 21 : 945-952, 1979.
- 44) 高柳 功: 二重身について, Capgras 症候群, 身体図式, 自我障害および離人症についての一, 二の検討, 精神経誌, 73 : 42-51, 1970.
- 45) TODD, J. : The Syndrome of Capgras. Psychiat. Quart., 31 : 250-265, 1957.
- 46) 富岡秀文, 鳥居方策, 他: 器質性脳疾患における Capgras 症候群 —回復期に本症候群を呈した脳炎の 1 例—. 精神医学, 24 : 65-75, 1982.
- 47) VIÉ, J. : Un trouble de l'identification des personnes. L'illusion des sosies. Ann. Méd. Psychol., 88 : 214-237, 1930.
- 48) WESTON, M. J. et WHITLOCK, F. A. : The Capgras Syndrome following head injury. Brit. J. Psychiat., 119 : 25-31, 1971.